



篠塚さんのウィッグブーケは2017ミスインターナショナル準ミス藤本(旧姓福井)千聖さんのウェディングにも華を添えた



一つのブーケが3通りに変身する「ウィッグブーケ」は、篠塚さんオリジナル商標登録が終わり、現在実用新案を申請中



1. 人生の転機となった息子さんの結婚式 2. インスタグラムのプレゼント企画で当選した方のウェディング 3.4. お母様が娘さんのためにレッスンで作ったブーケ 5. 七五三のボールブーケ

ど、そうでない人のためにも、リーズナブルな多様性ブーケを提供したいと思って始めました。」  
今後はこのウィッグブーケを日本中の方に知ってもらえるよう、広める活動もしていきたいと考えているそうです。  
また、コロナ禍で結婚式が延期や中止になり辛い思いをしている花嫁さんを応援したいという気持ちから、昨年11月には仲間のデザイナーとInstagramでブーケをプレゼントする企画をした篠塚さん。生徒さんや花嫁さんを思う強い気持ちで、新たなアイデアを次々と形にしていきます。

「造花は私に第二の人生を教えてくださいました。普通だったら家で孫の面倒を見ている歳。普通の主婦がそこから新しい事を始める、そのエネルギーをわかせてくれた造花ブーケに出会えた事に、本当にありがたく感じますね。」  
生徒さんの声に誠実に耳を傾け、オリジナルのアイデアを次々と形にし、技術を磨くために学び続ける。お店の名前「フルールパレット」に込められた「パレットにたくさんのお色が広がるように、お花の輪が広がってほしい」という願いの通り、篠塚さんの作品でたくさん笑顔の輪が広がっています。

80歳になってもブーケを作りたい

篠塚さんに、今後の夢について伺いました。

「80歳になってもブーケを作りたいなと思います。花嫁さんを思いながらブーケを作っている時が一番楽しい。結婚式や七五三など、人生の大事な節目に選んでもらって喜ばれると、これ以上の幸せはないんじゃないかというくらいうれしくなります。だから辞められません。」



「57歳で新しい夢に出会え、61歳まだまだ夢の途中。学びの旅はしばらく続きそうです」

「作っている時に無心になれるし、何より楽しかったんですよ。自分が一から作ったブーケをお嫁さんが結婚式で持つてすごく輝いている姿を見て、ああ、これって何か良いな。人に何かをして喜んでもらえる仕事っていいなって思っ、本格的に始めました。」  
そう思った篠塚さんは、一カ月後に造花ブーケのレッスンに通い始めます。

それまではご主人の実家のガソリンスタンドを手伝っていました。「軽トラックで灯油の配達もしていました。感謝の言葉をかけられると嬉しくて、20年近く頑張りました。その時はまさか数年後に自分がお花に囲まれて仕事をするようになるとは想像もしていませんでした。」

造花ブーケを始めたのは57歳の時。アーティフィシャルインテリアブーケ協会認定講師の資格も取った篠塚さんは、技術にさらに磨きをかけるため、上級者向けのレッスンを受けられる大阪へ通い始めます。

金曜日の仕事後に飛行機で大阪まで向かい、土曜の午前中からレッスンを受けて、終わったら利根町に戻り月曜からまた仕事という生活。とてもハードなスケジュールのように思えますが、「好きな事をやっているから、本当に楽しくて」と笑顔でその時の事を振り返ります。

現在はご自身の写真撮影のスキルをアップさせるために、フォトレッスンに通い、カメラの技術を磨いています。



フォトレッスンの様子と篠塚さんが撮影した作品。現在は中級コースに通っている

生徒さんを思う気持ちから生まれたオリジナルのブーケ

ある生徒さんが娘さんのブーケを作りに来た時のこと。白ブーケ一つを結婚式と披露宴の両方で使いたいと聞き、篠塚さんはウィッグブーケというオリジナルのブーケを思い浮かべます。「ウィッグブーケは、一つのブーケで形も色も変身させることのできるブーケです。例えば結婚式の時は真っ白い垂れ下がるデザイン(ウィッグ)を外し向きを変えて、色の違ったピンク系のブーケに変わる、というもの。ブーケって、ドレスが決まってから最後に予算内で決めますよね。お金を出せば大きなブーケを何個も作れるけ

ご主人は少年野球チーム利根スターズで25年間指導していた篠塚繁美さん。家族の支えがあって今の仕事ができている



結婚情報誌ゼクシィに掲載された、篠塚さんのウィッグブーケを使ったご夫婦の特集ページ



利根町の文化センターや生涯学習センターで講師を務めることも。次回は文化センターで7月から講座が始まる。「町民の方が気軽に集える教室になってくれたら嬉しいです」